九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[2]文學研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2557126

出版情報：文學研究. 2, 1932-10-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

彙報

九州文學會

一、役員異動。四月十五日本會委員片山正雄氏の九州帝國大學教授辭任に伴ひ、本會委員に左の如き異動あり。

委員辭任　片山正雄氏
新委員就任　小牧健夫氏
客員推薦　片山正雄氏

研究室

一、國文學研究室に於て七月二十九日方言書小展觀開催。展觀書目を謄寫し來觀者に頒つ。

九大國文學會

一、今春卒業生九名を出し、新入會會員六名を迎ふ。四月以降の活動狀況次の如し。

一、例會

五月十四日（土）市内橋口町瓜洲屋にて
六月廿八日（火）九大第二學生集會所にて

一、定例講讀會

第一部、春日教授指導、毎週一回水曜午前、於第二演習室
用書「堤中納言物語」及び「國文學叢影上世篇」
第二部、小島助教授指導、毎週一回月曜午前、於第一演習室
用書「芭蕉七部集」

一、研究發表會

九月二十七日九大第二學生集會所にて開催

一、授業見學

六月十三日（月）午後、福岡中學校にて第四學年第三學年及び第一學年の國語並に漢文の授業見學

一、會報第三號

六月二十七日印刷發行

九大英文學會

一、第二十三回例會

十月一日　於九大圖書館會議室　研究發表

1.「セキスピア研究の諸態度」　國瀨勝太郎君
2.「ブラウニング夫人の詩」　石丸淺雄君

一、十月十六七兩日にわたつて京都同志社大學講堂に於て開催される日本英文學會本年度大會に九大英文學會より豐田教授、中山助教授出席された。

一、中山助教授は十月二十四日、約二ケ月の豫定にて學術探檢旅行の途にのぼり、マニラ、香港、上海に出張。フイリツピン

に於ける米語の狀況、大學教育の狀態視察、並に上海、香港各地に於けるPidgin-Englishを研究の後、歸學の豫定。

一、片山正雄前教授を贊助會員に推薦す。

尙新學年と同時に小牧教授をむかへてわが獨逸文學會はこゝにあらたなる歩をふみだすことになり、今年よりは研究發表會を少くとも月一回之れを催すことに決定した。しかし小牧教授の御都合で研究發表は第二學期より行ふことゝなる。

獨逸文學會

一、三月二十一日、新三浦に於て片山教授の送別會を催す。片山教授は、全月二十六日午後五時四十七分博多驛發列車にて御家族御同伴東京へむけ當地を去らる。

一、片山教授の後任として四月下旬、東北帝大より小牧教授を迎ふ。

一、五月四日（水）正午、佐藤助教授私室に於て新任小牧健夫教授の歡迎茶話會開催、出席者八名。

一、五月廿八日（土）新入生歡迎會兼獨逸文學會懇親會を新三浦に於て催す。出席者小牧教授外十一名。開會午後六時半、閉會同九時。

一、六月廿日（月）小牧教授御擔當の「エグモント」の演習終了を期とし、午後三時より第三演習室に於て茶話會を催す。席上あらたに獨逸文學會の會則を制定す。終つてレコードの鑑賞にうつり、午後五時半閉會す。出席者小牧教授、佐藤助教授、外十名。

一、本年度新入會員。福田武夫、綠川武、富岡昭、吉野茂。

九州帝國大學法文學部文學關係講義題目（昭和七年第一學期）

國文學

	一週時間	單位數	擔任教官
國語學概論（文字文體篇）	二	〇・五	春日教授
近世の小說（連續講義）	二	〇・五	小島助教授
演習、萬葉集	二	〇・五	春日教授
演習、世間胸算用	二	〇・五	小島助教授

支那文學

章炳麟の學說	四	一・〇	山內講師

英文學

英語史概說	二	〇・五	中山助教授
英文學演習	二	〇・五	同
演習、近代小說講讀	二	〇・五	同

英文學演習　二　〇・五　浦瀨講師

佛　文　學

佛文學史概說（十八世紀）　六　一・〇　成瀨教授

演習、Molière;—Tartuffe　二　〇・五　須川助教授

十七世紀佛文學史　二　〇・五　同

佛文學史概說（後半）　二　〇・五　同

獨　文　學

獨逸語學概說　二　〇・五　佐藤助教授

獨文學演習　二　〇・五　小牧教授

獨文學演習　二　〇・五　佐藤助教授

梵　文　學

梵文學講讀　二　〇・五　小野島助教授

梵語及巴利語　二　〇・五　小野島助教授

言　語　學

言語學概論　二　〇・五　吉町講師

英文科卒業論文題目（昭和七年十月提出）

一、エリホンに關する二三の考察　太田忠四郎

一、トマス・ハーデイの小說に於ける婦人觀　萩尾淳之助

一、シエリの思想と藝術　林理友

寄贈雜誌

日本文學（鹿兒島）、國學院雜誌、外來語研究、萬葉集古事記の新研究

新英米文學、英語學會誌、京城帝大英文學會會報、

音聲學協會々報、方言、文學、丘、國語と國文學、國語・國文

國漢研究、國民文學、ボトナム、帚木、曼陀羅、勁草、水甕、

福岡、歌と評論

後　記

第二輯の編輯は春日・小島の兩委員が擔當した。ポイント活字を使用し用紙を上質としたため、勢ひ、組版體裁の上に變更を加へた。但し專に剔れぬため幾多の不備があらうと思ふ。深く詫びる。元來、本輯は十月初旬に出づべき筈であつたが、一つは執筆諸家の御都合と、一つは印刷所を變更したのとで、かくの如き遲刊と相成つたのである。次輯は明年三月に發刊の豫定である。

第一輯以來の會員は本輯を以て會費切れとなる。挿入の振替用紙を利用して引續き會費を納められたい。